

令和 5 年 6 月 20 日現在

機関番号：34504

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00512

研究課題名(和文)グリム兄弟の思想の文化学的研究

研究課題名(英文)A Cultural Study of the Thoughts of the Brothers Grimm

研究代表者

村山 功光(MURAYAMA, Isamitsu)

関西学院大学・文学部・教授

研究者番号：20460016

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：グリム兄弟の思想を、従来の精神的・系譜学的研究ではなく、文化学的手法で追究した。すなわち、兄弟の思考の原動力となっているイメージ群を分析し、兄弟が活動を始めた1800年期およびそれ以前の18世紀における、それらのイメージをめぐるさまざまな分野(医学・考古学・政治・教育など)のディスコースとの連関を解明した。具体的には、『グリム童話集』扉絵の老農婦肖像画群と兄弟の民衆観・民間伝承観の形成との相関関係、伝承文芸の受容を授乳のイメージで捉える思考と18世紀以降のイデオロギー的な母乳ディスコースとの関係、民間伝承を発掘するイメージと当時の考古学(ポンペイ、恐竜)の関係である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、従来のように精神的・系譜学的な線状の影響関係を追うのではなく、グリム兄弟の思想をイメージ(メタファー)と言説の相互作用の相で捉え、連想が四方に拡張する動的変化として捉えている。兄弟の思想の養分となるイメージ群の分析、およびそれらが同時代の知や社会的現象とどのように関連し合っているかに着目する研究は、全く新しいと言える。本研究は、グリム兄弟を扱うケーススタディーの枠を越えて、一般に思想形成におけるイメージ的思考の意義・メカニズムを探る一つの手立てを示しうる。イメージと思考の発展的相互作用は、デジタルメディアでイメージが氾濫する現代のイデオロギーや社会現象の解釈にも示唆を与える。

研究成果の概要(英文)：For my research I applied the methods of 'Cultural Studies', which are different to the commonly used approaches like that of 'geistesgeschichte' (history of ideas). First, I analyzed the metaphors/images in the thought of the Brothers Grimm, then I figured out their interrelations to the discourse of different intellectual and social fields like medicine, archeology, politic, education in the 18th century. For example, the relation between the portraits of the ideal female storyteller 'Viehmaennin' and the Grimms' conception of the 'Volk' and its folkloristic tradition, between their metaphor of breastfeed for the reception of folktales and ideological discourses of mother's milk in the 18th century, between their metaphor of excavation of old tradition and the archaeological explorations of Pompeii or dinosaurs.

研究分野：西洋文学

キーワード：グリム兄弟 イメージ学 メタファー学 文化学 ロマン主義 イデオロギー 近代批判

1. 研究開始当初の背景

(1)さまざまな傾向を包摂するドイツ・ロマン派の中で、グリム兄弟は独自の位置を占めている。すなわち、彼らは『グリム童話集』に代表される民間伝承のポエジーの価値を称揚する文学コーディネーターであると同時に、多言語の膨大な資料の比較研究を通じて伝承の本来の姿を探る厳格な文献学者でもあった。ドイツではヘルダーの『民謡集』によって民衆の文芸への関心が掻き立てられ、ロマン派の詩人たちがこぞって民謡やメーメルヒェンを素材に創作した中で、グリム兄弟は民衆を極度に美化・理想化し、啓蒙期には迷信の権化として軽蔑された民間伝承のポエジーに古代の名残を見出して学術研究の対象としたのだ。通説ではこの姿勢は、兄弟の客観的学術性あるいは現実逃避的過去崇敬の表れとみなされてきた。

(2)また、グリム兄弟の文学観、ゲルマニスティク(ドイツ文学語学研究)史上の位置については、従来はもっぱら先行する詩人・思想家からの影響関係を追究する精神史的・系譜学的研究によって、いわば一本の線の上に位置づける方向で行われてきた。この思想史研究は、20世紀前半に高精度で行われ優れた成果を収めたため、あたかも研究し尽くされた分野であるかのように思われてきた。また、ナチ時代のドイツ精神を扱う傾向に対する批判・反発もあり、次に続く数世代には継承されてこなかった。

(3)報告者はこの精神史的研究から多く学ぶと同時に、この研究方法の欠点、つまり、兄弟を二人一組とまとめる思想史のマクロ的・定型的な手法では兄弟の思考・志向の微妙な差異や諸概念の多様な変奏が掬い取れないことを批判・修正して、著書(2005) *Poesie – Natur – Kinder. Die Brüder Grimm und ihre Idee einer ‚natürlichen Bildung‘ in den Kinder- und Hausmärchen* (ポエジー・自然・子ども — 『グリム童話集』におけるグリム兄弟の自然的自己形成の理念)では兄弟それぞれの言説をミクロレベルで網羅的・詳細に分析した。この著作のもう一つの柱は、『グリム童話集』をめぐるグリム兄弟の思想を、従来のような民族意識高揚のための民衆文化への愛着ではなく、近代批判が意識に裏打ちされた近代市民家庭における自然性の再獲得を目指すストラテジーとして解明することだった。

(4)博士論文でグリム兄弟の言説を徹底的に検証したことにより、兄弟の文学理論のみならず歴史、学術研究、教育・政治などについての思想全般に底流する自然ポエジー(Naturpoesie)概念の位置価値が明確になった。集団の中で匿名かつ無意識的に生成したとされる自然ポエジーは、19世紀の民間伝承および(さまざまな)古代の叙事文学を包括する概念であり、近代批判意識から憧憬されたこの自然性が無自覚的・集合的民衆文芸、民衆・子ども・女性の他者性、文学の本来の姿としての声の文化、言語と結びついた民族的個性などへの価値判断の基盤になっているのだ。ここには、古代の自然から遠ざかってしまった近代の人為状態において、再び自然を取り戻そうという、1800年期の芸術・思想家に共通する現状改革の試みの一例が表れているのである。

(5)この成果に基づき、新たな視野が開かれた。すなわち、兄弟の思考には自然性を表象する際にさまざまなメタファーが多用されており、このイメージ(図像)的思考を分析することで、兄弟の思考方法および思想の独特な性質および限界を解明することができるという視点が獲得された。グリム兄弟における視覚的イメージと思考の相互作用については、報告者はすでに、ロマン派の画家 Ph. O. ルンゲが提唱した新しい風景画との関係を考察し、ロマン派美学の主要概念アラベスクとヒエログリフの重要性を論じた。本研究では、自然性を表象するさまざまなメタファーを分類し、イメージを提供している自然科学・社会思想・芸術・政治の言説を分析することにより、従来の言説中心的考察では見えていなかった連関を可視化しようと試みた。

2. 研究の目的

(1)報告者は今まで、二人一組のグリム兄弟という同一性を疑問視し、グリム兄弟それぞれの思想の差異を分析し、彼らの思想が通説で言われてきたような歴史的・純学問的関心あるいは過去の文学遺産への敬虔心に収斂されるものではなく、同時代を批判し現状改革をめざす現実直視・未来志向的性格を持つことを明らかにしてきた。この視点に立脚して本研究は、兄弟の思想に見られる、19世紀初頭のドイツ市民社会の家庭に働きかける意図および戦略の解明を目的としている。

(2)グリム兄弟は太古からの自然性を保持していると考えられた民間伝承、特にメーメルヒェン(昔話)を、近代の都市住民に再び自然な方法で、すなわち母を始めとする大人が小さい子どもに、朗読や語り聞かせによる口承で受容されるようにと考へて『グリム童話集』を編集した。その際に彼らは文献学者として、伝承のメーメルヒェンの正しい形を校訂し、伝承に適したとされる話を選別しカノン化した。そこには彼らの市民社会イデオロギーが不可分に結びついている。すなわち、グリム童話にはドイツ古代の神話的記憶が豊富に含まれており、

これを時代を超えて伝承してきた 民衆 (Volk) のもとで口承によって (書承によって恣意的・決定的に変更されることなく) 保持されており、この民族言語の産物である 自然 を家庭で再受容することによって近代ドイツ人は人為的文化による弊害 (近代的分裂) を — 全面的にはなくとも — 解消できるのではないかと、その際に核家族の 女性 (特に母) を動員しようという期待である。

(3) グリム兄弟が用いるさまざまなメタファーは、自然性 の思考を中心に展開している。民間伝承の植物的 自然発生、古代からの記憶を保持する 自然人 としての民衆、その理想的語り手の 農婦、理性的・功利的思考の強い男性の対極とされる 自然に近い性 としての女性、文字に頼らない文芸の 自然な 伝承の比喩としての授乳、純心無垢で無自覚的に言語や民間伝承を吸収する子どもの 自然 など。このさまざまな 自然性 は、背景にさまざまに異なる文化的・社会的領域からイメージが供給されている。イメージの選択、結合の仕方、イメージが喚起する文化的意味連関を分析し、自然性 の持つ可能性と問題を明らかにしたい。すなわち、自然 を引き合いに出すことによって、近代的分裂の克服やユートピア志向につなげることもできるが、同時に 自然の法則、民族固有性こそが本来の 自然 であるというように拘束的に作用しかねないのだ。

(4) 本研究は、グリム兄弟の 自然 をめぐるイメージ的思考の性質やメカニズム、その限界を解明する。イメージに支えられた思考と言説が喚起するイメージとの複雑な相互作用、および言語化しきれない感覚をも包含する思考のあり方全般を考察する手がかりとして、本研究がイメージ学の一つのケーススタディーとなれば幸いだ。

3. 研究の方法

(1) グリム兄弟の思想・文学理論の研究史を概観すると、1920年代から50年代にかけての精神史 (Geistesgeschichte) 的方向 (Ernst Lichtenstein 1928, Karl-Eugen Gass 1940, Klaus Ziegler 1952)、1960年代・70年代は 民族精神イデオロギー 批判 (Hermann Bausinger 1968, Ulrich Wyss 1979)、1980年代以降はグリム童話の提供者調査などの緻密な文献学 (Heinz Rölleke 1986, Lothar Bluhm 1997) が主な潮流をなしてきた。1990年代以降は、新たな精神史的研究 (Otfried Ehrismann 1992, 堅田剛 2007)、あるいは1980年代のアメリカ (Ruth Bottigheimer 1987) に続くジェンダー的アプローチ (野口 2016) も行われている。近年は、グリム兄弟の書簡編集や各種一次資料の掘り起こしを主眼とする緻密な文献学が行われている (Holger Ehrhardt, Berthold Friemel など)。これらの研究は、個々の詩人・思想家の思想的系譜的にたどる傾向が顕著であり、例えば 民衆ポエジー に関してはヘルダー、サヴィニー、プレントナーノ、ゲレス、シェリングなどからの影響関係を線状に跡付けようとしてきた。

(2) それに対して本研究は、ドイツの 文化学 (Kulturwissenschaft)、特に英米文学者 (Aleida Assmann など) たちが発展させた文化学に多くを学んでいる。文化学は、古いタイプの精神科学が教養市民層の作り上げた学問的カノンに安住し、伝統的に認知された文学テキストや精神に価値を置いてきた (解釈学など) のに対して、ハイカルチャー に限定されない新しい 文化概念を提唱し、研究対象においてもアプローチの方法においても領域横断的な視野を開いた。それにより、文学テキストは文化・社会の歴史的・空間的諸問題の複合として捉えられ、複眼的に解読される必要が生じた。着眼キーワードとしてはメディア、記憶、身体、ジェンダー、ポストコロニアリズム、アイデンティティーなどが挙げられるが、本研究もこの文化学的アプローチから知的刺激を吸収し、グリム兄弟研究に新しい視点を獲得した。

(3) 例えば、グリム兄弟の民間伝承への関心、特に『グリム童話集』編集をめぐる彼らの思想・文学理論を、文化学的アプローチが対象としてきた 記憶 の問題群として考察し直した点では、従来の研究を刷新している。兄弟は民間伝承を蒐集し (記憶の保存) それを学術的に批判選別して (文化的記憶 のカノン化) 伝統的社会が崩壊しつつある近代において 新たな口承文化を作るために、文字で定着されたテキストを再び声の文化に戻す役割を、核家族の母に期待した (記憶の再生) と考えられる。その際には、叙事文学 (メーメルヒェンなど) が声に乗った文芸であること (記憶を保持する文学ジャンル) を過剰評価し、声を発し耳で聞くという身体性 (パフォーマンスによる記憶の定着) を重視して、民族アイデンティティーの支柱にしようとする (記憶の政治化)。

(4) 本研究は、文化学の中でも特に アイコニック・ターン (iconic turn) の流れに位置付けられ、イメージ学 (Bildwissenschaft) の一例という性格を持つ。グリム兄弟の思考・思想はさまざまな [自然] メタファーに彩られている。集団の中で無自覚的に生成した 自然ポエジー は植物イメージで捉えられ、この文学の伝承者つまり 古代から変わらぬ生活を続け、自然に近い環境で生活している民衆 は、いわば 近代における古代人、近代都市住民の他者 として表象されている。自然ポエジー が1800年期の市民社会においても 自然に 再受容されるためには、これを収集して文字化した本 (『グリム童話集』) を 自然に近い性 とされる女性、特に 母 が、乳幼児に 授乳 するイメージで読み聞かせることが要請されている。自然・民衆・

女性・授乳などのイメージは、それぞれがさまざまな文化的・社会的背景を持っており、境界を越えた極めて複雑な結合・融合の仕方では表出している。グリム兄弟のイメージ思考をディスクール分析(Diskursanalyse)的に考察することで、彼らの思考の意外な養分や新たな連関が見えてくる。

4. 研究成果

(1)『グリム童話集』の第2版(1819)には、グリム兄弟の弟で画家のルートヴィヒ・エーミール・グリムによる語り手女性の肖像画が扉絵として付された。この女性は重要な語り手の一人で、貧しい農婦(実際は仕立て屋の妻)60才近い年齢、田舎在住、方言話者などの点、および記憶力が絶大で語りが繰り返し正確であることから、兄弟が探し求めた理想の語り手と目されていた。画家がこの女性を1814年から1819年まで、兄たちの指示のもと3回にわたって描いた一方で、グリム兄弟はこの女性を公的・私的文書で再三賞賛し、容貌や性格、記憶と語り、生活の窮状と死など詳細に記述していた。報告者は作画と言説の間の相互作用の過程を確認し、

理想の語り手像を視覚的に確定・固定するために、兄弟3人は互いの作品・言説を参照し合って造形したことを論証した。その際に、描かれているモチーフや姿勢、花(バラのつぼみとブリムラ)の象徴的・民俗的意味、背景の斜線配置の変化などをイコノグラフィック的手法で解読し、また、テキストと図像の結合を分析して、民衆を近代人市民の他者として美化し表象するオリエンタリズムの視線を明らかにした。これにより、太古から変わらない純ドイツの伝承としての『グリム童話集』を演出したいグリム兄弟のイデオロギー的性格を解明した。論文

Intermediale Wechselwirkung von Text und Bild zur Stilisierung einer idealen Märchenerzählerin. Die Entwicklung des Dorothea Viehmann-Porträts von Ludwig Emil Grimm. In: Fabula Vol. 60 (2019) は日本独文学会・DAAD賞を受賞した。

(2)民衆によって古代から口承で伝承されてきた自然ポエジー(メールヒェンを含む)はグリム兄弟においては民衆ポエジー(Volkspoesie)とも呼ばれるが、兄弟はこれを消滅の危機から救い文字に定着し、近代市民社会の核家族に受容されることを企図した。ここには断絶において接続を試みる無理な力技が見られるが、この接続が自然に行われようと主張するために母乳メタファーを用いている。すなわち、メールヒェンは母乳(Muttermilch)のように滋養に満ちた食物であり、母は子に授乳するように自分の声で語り込み、子は全身を使ってこれを聞く(身体性)。愛情に満ちた母の声によって語られるメールヒェンは、母語(Muttersprache)詩的な美、倫理観、民族意識、想像力などのさまざまな要素を同時に伝達することができる。このメタファーは、18世紀後半以降のヨーロッパの母乳ディスクールを念頭に置くと、そのイデオロギー的性格が明らかになる。すなわち、母に自分で授乳させるために、医学・生物学・教育学・司法・政治の[男性]専門家たちが協働して、授乳の自然性および新しい母性論を形成した。その中で、自然性の再獲得を目指す文献学者グリム兄弟は、いわば自然ポエジーの専門家として市民社会の母性イデオロギーの形成に参加しているのである。

(3)グリム兄弟とゲーテの関係を、古代ドイツ文学、民衆ポエジー、翻訳の観点から考察した。ゲーテ世代年少のグリム兄弟を信頼し、兄弟の文献学研究を吸収していたし、兄弟はゲーテの作品に心酔し、人間ゲーテを仰ぎ見ていた。兄弟とゲーテの関係を軸にすると、当時の知的状況の一端が見えてくる。兄弟がゲーテの知己を得ることを可能にしたネットワーク(アルニム、ブレンターノ、サヴィニーらによる上流階層の交際関係および学術・芸術的交流)北欧文学や『ニーベルンゲンの歌』など古代ドイツ文学、および未だ衰退していないセルビアの口承叙事詩への関心、古い文学や外国文学の翻訳理論をめぐる議論、歴史画を賞揚するゲーテの古典主義美学の限界などである。

(4)1800年頃にドイツで民間伝承を蒐集し研究したグリム兄弟と、1900年期の日本でそれを行った柳田国男は、ともに民俗学の開拓者として並び称されることがあるが、両者の共通点と相違が論究されることは少ない。グリム兄弟は現実の民衆に接することはほとんどなく、民間伝承、古代北欧文学や中世文学文学を通じて、古代と連続関係にある民衆という像を観念的・抽象的に構築した。柳田は農政官僚として各地を視察し、民衆の生活に実地で対峙した点で、グリム兄弟とは異なっている。しかし、民衆を近代都市住民の他者として表象しようとする傾向は両者に共通しており、そこには憧憬と軽視が入り混じる一種のオリエンタリズムの姿勢がみられるのである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 村山 功光	4. 巻 第71巻第3号
2. 論文標題 グリム兄弟の 母乳メタファー 近代市民社会におけるメールヒエンの受容をめぐって	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『人文論究』関西学院大学人文学会	6. 最初と最後の頁 19-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 村山 功光	4. 巻 42
2. 論文標題 グリム兄弟とゲーテの関係の諸相 古ドイツ 文学・民衆ポエジー・翻訳	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 モルフォロギア ゲーテと自然科学	6. 最初と最後の頁 18 - 42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Isamitsu Murayama	4. 巻 60
2. 論文標題 Intermediale Wechselwirkung von Text und Bild zur Stilisierung einer idealen Maerchenerzaehlerin. Die Entwicklung des Dorothea Viehmann-Portraets von Ludwig Emil Grimm	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Fabula. Zeitschrift fuer Erzaehlforschung	6. 最初と最後の頁 224-243
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1515/fabula-2019-0015	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 村山功光	4. 巻 70-1
2. 論文標題 グリム童話の 理想の語り手 の造形におけるテキストと画像の協働 ルートヴィヒ・エーミール・グリムによるドロテア・フィーマンの肖像	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 人文論究	6. 最初と最後の頁 141-167
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 村山功光
2. 発表標題 図像とテキストの相互作用 - 『グリム童話集』扉絵の肖像
3. 学会等名 阪神ドイツ文学会（春季研究発表会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 村山功光
2. 発表標題 グリム兄弟とゲーテの 関係 の諸相
3. 学会等名 ゲーテ自然科学の集い（第52回研究発表会）（招待講演）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 畠山寛・吉中俊貴・岡本和子編著 村山功光 荒又雄介 高橋優 川島隆 他30名	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 257
3. 書名 『ドイツ文学の道しるべ - ニーベルンゲンから多和田葉子まで』 「『グリム童話集』」担当	

1. 著者名 Takahashi / Shimada / Hamada / Borsche	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Alber	5. 総ページ数 296
3. 書名 Herder, Japan und das fremde Denken	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------